

5) ヤブカラシとヘクソカズラ＝藪枯と屁糞葛

ヤブカラシはブドウ科のツル性多年草で、北海道の西南部から南西諸島まで日本のどこでも普通に見られる。二股になったマキヒゲで他物にからみながら繁茂し、特に公園や道路際のフェンスなどに茂っていることが多い。葉は5枚の小葉からなる複葉で、互生する。夏、葉腋に淡緑色の4弁花を多数かたまって着けるが、花弁はすぐに落ち、淡紅色で花盤状の花托が現れるため、2色の花が咲いているように見える。この花盤には蜜が多く、蝶やハチがひっきりなしに訪れる。またヤブカラシの多くは3倍体のため、果実をつけないが、ごく一部の2倍体株には球形の初めは淡緑色で、熟すると光沢があって黒紫色に熟する果実をつける。和名の由来はヤブを枯らしてしまうほど繁殖力の強いことによるもので、別称としてビンボウカズラなどとも呼ばれている。この意味は庭の手入れなどする余裕がないほど貧しいという意味、あるいはこの植物に絡まれた家がたいそう貧相に見えるという意味からである。学名は『*Cayratia japonica*』で、中国では『烏斂莓』(ウレンバイ)という。根茎は横に長く伸びて、何処からでも芽を出して繁殖する。この根茎は生薬として、腫物や毒虫に刺されたときに効き、利尿、解毒、鎮痛などに用いられた。また若芽は茹でてあく抜きをすると、意外にも食用になる。

ヘクソカズラはアカネ科のツル性多年草で、ヤブカラシと同じようなところに生える。ツルは左巻きで長く伸び、ときには10mを超えることも少なくない。葉は有柄で対生し、楕円形もしくは細長い卵形で、先が尖り、全体に臭気がある。これはこの植物の組織が傷つくと、中の成分が酵素のはたらきで分解され、揮発性の成分となり、特有の臭気を放つためである。ヘクソカズラにとっては食害を防ぐための自衛手段で、ヘップリ虫の防衛力にも似ている。夏期、葉腋から短い集散花序を出して、先が5裂した鐘状の小花を開く。花冠は灰白色で内部は紅紫色で美しい。このために「早乙女花」などともいうが、同じ理由により、その色合いが灸を据えた跡のようなのでヤイトバナ(灸花)の別名もある。和名の由来は葉や茎に独特の臭気があるため、ウマクワズとかクソネジラ、ヘクサンボなどというあまりありがたくない呼称が多い。学名は『*Paederia scandens*』で、属名は悪臭を意味しており、種小辞は「よじ登る」という意味である。中国では『女青』、『牛皮凍』である。この植物の特徴はその臭気に集約され「ヘクソカズラも花盛り」といえば、「番茶も出花」と同じ意味である。このため『万葉集』でも「糞葛」として1首が見られる。

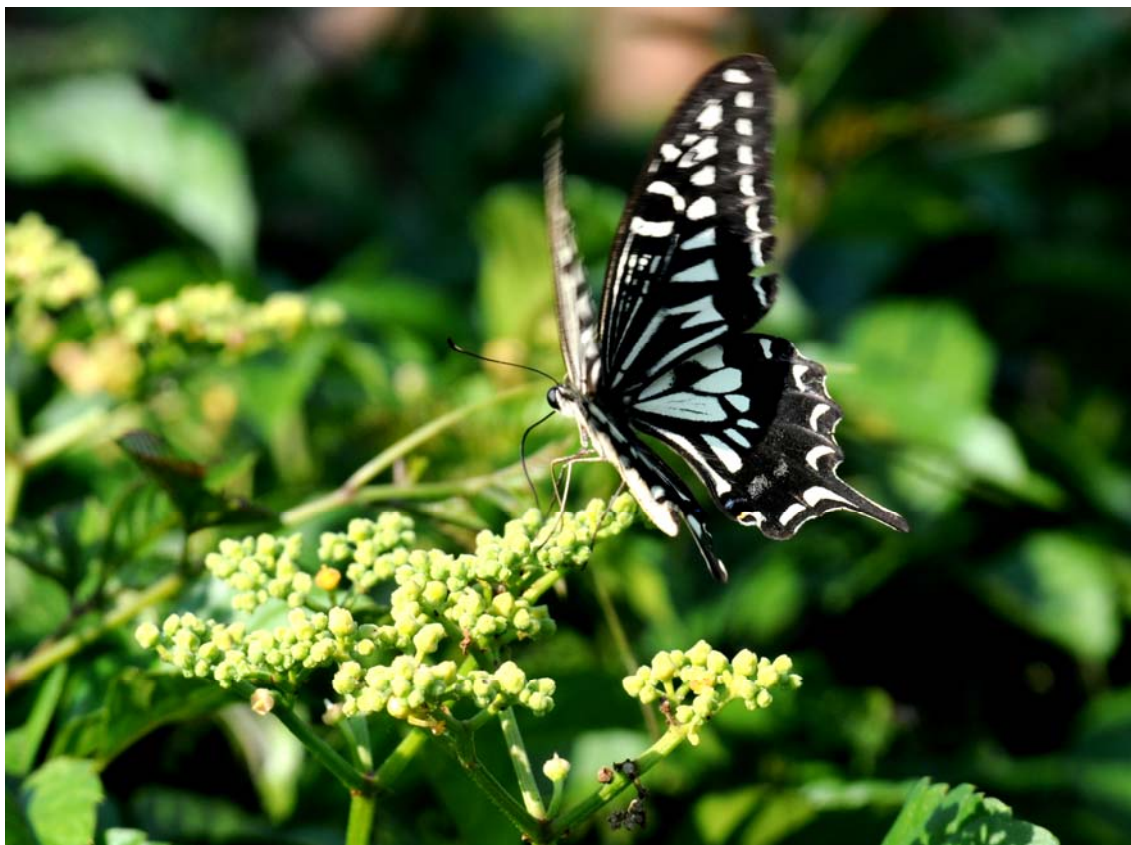
自莢(カラヅ)に延(ハ)ひおほとれる屎葛(クワヅラ) 絶ゆることなく宮仕せむ
高宮王(タカミヤノオオキミ)の歌でサイカチの項(02-02-11)でも引用したのでご確認
いただきたい。それにしても当時は「糞葛」とっていたものが、後世、「屁」までついで
しまったらしい。しかしよく熟した果実は乾燥させると臭気が消えるため、すり潰して、
シモヤケの薬などとして用いられていた。



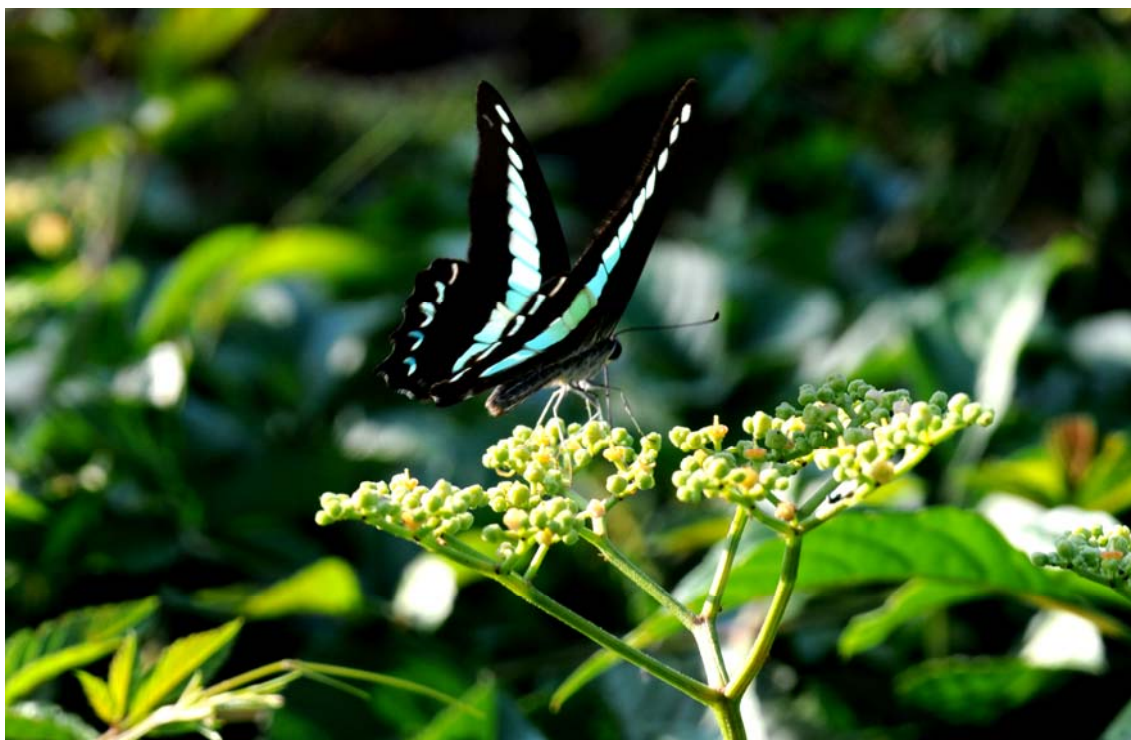
ヤブカラシの繁殖力はすさまじい。地表に添うように伸びた根茎のいたるところから芽を吹き繁殖する。しかし通常、種子はできない(さいたま市緑区)。



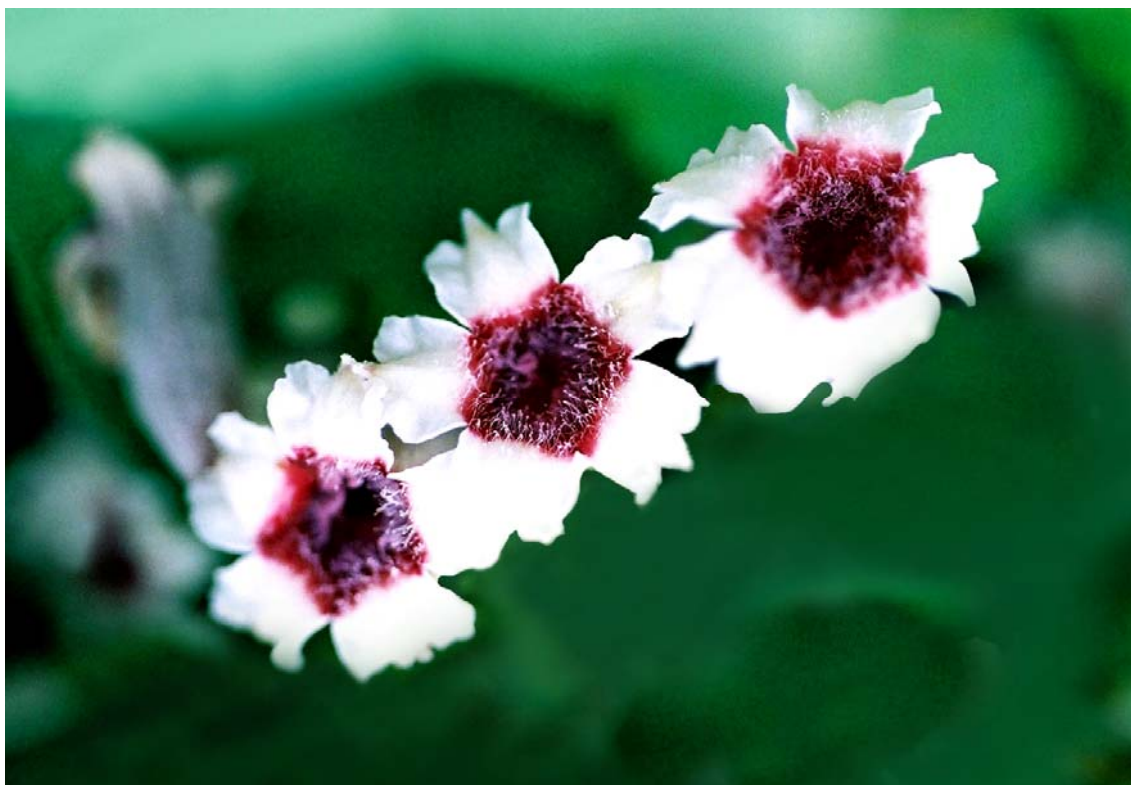
ヤブカラシは通常は3倍体で果実が出来ないが、稀に2倍体のものもある。これは珍しい2倍体のヤブカラシの果実(長野県軽井沢町)。



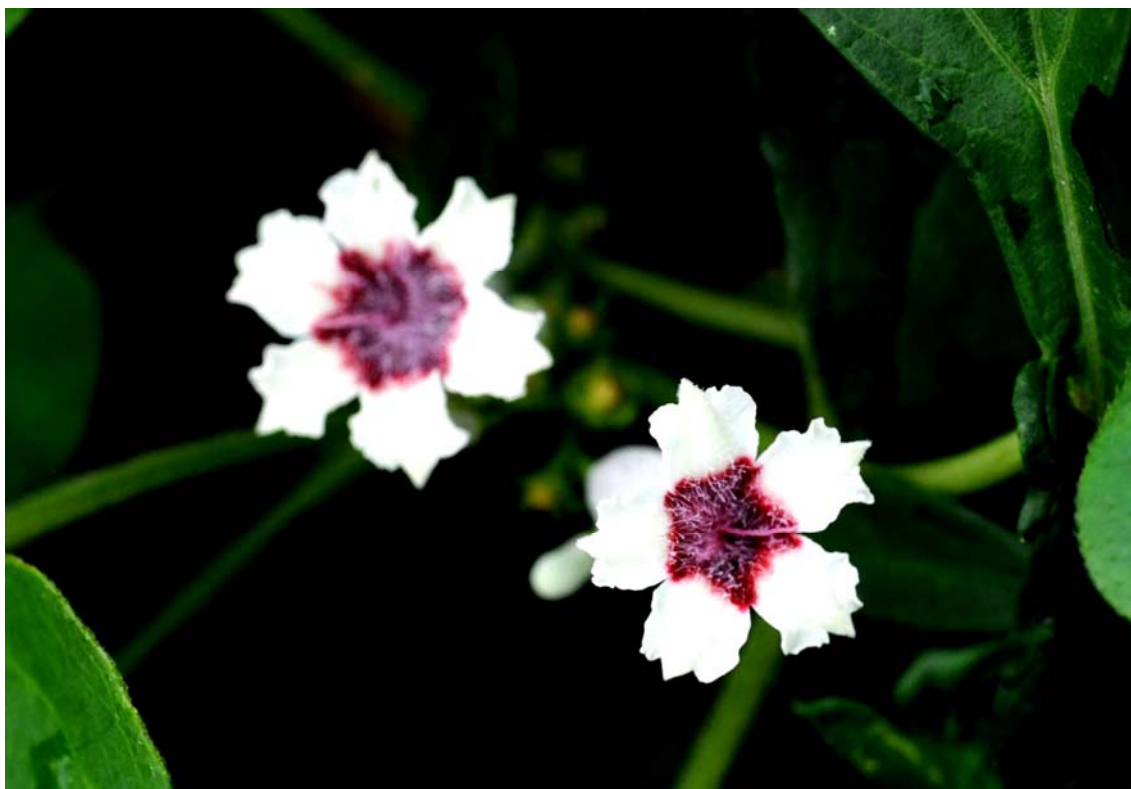
ヤブカラシの花には蜜が多いと見えて、ハチやチョウがよく集まってくる。アゲハチョウが夢中で蜜を吸っている(さいたま市大宮区)。



蜜を吸いにやってきたアオスジアゲハ(さいたま市大宮区)。



ヘクソカズラの花は小さいが、近くで見るとなかなか可憐である。このため「ヘクソカズラも花盛り」などといって揶揄されてきた(さいたま市緑区)。



ヘクソカズラの花、密について次々と咲いてゆくが、散るのも早い(さいたま市緑区)。



臭気さえなければ、なかなかいい花であるが、直径は1センチに満たない。白い円錐形の蕾は次々と開花し、夏中咲き続ける。(さいたま市緑区)。



ヘクソカヅラの若い果実。茶色くなるにつれて悪臭も消えてゆく(埼玉県嵐山町)。

[目次に戻る](#)